

FINE通信

今年のテーマ：癌の「勉強」

新潟大学名誉教授・安保徹先生の話から⑥

☆忘れ去られた「治癒反応」

- 意外と、肺転移、肝転移、骨髄転移した後に消えていることがある。
- 免疫細胞が ガンをたたくときには、必ず炎症反応が起こって、発熱、痛み、不快を伴います。肺ガンなら咳がでてきたりします。
- 患者さんも、医師たちも、こういう症状が治癒の過程で起こることをわかっていないので、ついその症状を止めたくなるのです。
しかし、薬を服用してその症状を止めることは、治癒反応を止めているわけで、ガンを治すためには、まったく逆効果なことです。
- ガンの自然退縮につながる 治癒反応 がはじまると、一週間ぐらいは寝込むような つらい症状が続きます。その後、リンパ球が増えて ガンが退縮しはじめます。
- この 治癒反応 は昔から、傍腫瘍症候群という名前で、ガン患者の治癒過程で必ず起こる反応 として知られていました。
ところが戦後、抗がん剤を使うようになって以来、その事が忘れ去られてしまいました。
- 発熱、痛みのほかに、しびれなどの神経症状もでてきます。傍腫瘍神経症候群とよばれます。
- 体が 血流障害 を治そうとして、血流がおしかけるときに 痛みがでます。それを痛みどめで常に止めていると、血流障害によって顆粒球増多が起こり発ガンが促されます。
- 血流を止めれば、炎症反応が止まる、これが消炎鎮痛剤のしくみです。これは、病気の治癒による消炎とは まったく違います。
- ガンが見つかったら、発ガンした場所に 血流が増えるように するべきだと思います。